

2.冠婚葬祭と情報化に関する研究

はじめに

山田 慎也

本研究は、冠婚葬祭の近代化について、情報化という観点からその実態を明らかにすることを目的としている。新型コロナウイルス感染症の流行により、人々の直接的な接触が大幅に制限され、冠婚葬祭などの儀礼も従来のように実施できなくなっている。そこで注目されているのが、デジタル技術を利用したインターネット上のリモート結婚式や葬儀、法要であり、デジタル情報技術の利用が進められるようになった。ただし、冠婚葬祭を取り巻く状況はこれに留まらず、インターネットを利用した故人の紹介や追悼、契約や企画販売、また儀礼知識の情報流通などによって、それを提供する業者の側だけでなく、儀礼を行っている一般の人々にも大きな影響を受け、儀礼の伝承のあり方にも大きな変化が生じている。

しかし、情報化の観点から見ても、このようなデジタル技術の進展だけが、現代の儀礼に影響を及ぼしているわけではない。とくに近代以降の印刷技術の発展により、結婚式や葬儀のマニュアル化が進み、すでに儀礼の伝承と形態に影響を及ぼしてきた。しかも儀礼の種類によって、そのマニュアル化の過程や状況も異なっており、例えば結婚式はすでに近世から『婚礼罌粟袋』などの作法書がつくられ、近代になり神前結婚式、仏前結婚式など新たな結婚式の様式が誕生することで、作法書の種類は多岐にわたっている。一方で葬儀のマニュアル化は遅く、盛んに発行されるのは戦後のことである。ただし葬儀業者による祭壇のカタログ化はすでに戦前期から始まっているなど、産業化の展開によって情報化も進んでいった。

そこで本研究では、冠婚葬祭の多様な歴史的展開を情報化の観点から明らかにし、儀礼を行う人々にどのような影響を与えてきたのか検討し、人々の人生観や生命観を照射するものである。そのため、現代までの儀礼と情報化の過程との関係を明らかにするため、大きく印刷技術の展開とその影響を検討する「プリント班」と、デジタル技術の発達による情報化の過程とその影響を検討する「インターネット班」に分かれて検討を行うこととし、今年度はプロジェクトの初年度として調査を開始し、その経過の成果と今後の展望に関する報告である。